

汽船で松江へ帰ります。ハーンは、明治二十九年一月、小泉家に入籍、日本人小泉八雲となります。そして、この年八月一日八雲の家族と西田は同行、汽船で庄原へ着き杵築へ向かいますが、帰りは一日、庄原まで着いたものの暴風雨で汽船が出港せず、一泊して翌早朝三時発の船で出発、五時に松江に着きます。

明治三十九年（一九〇六）田山花袋が備後からの旅の途次庄原から松江への汽船にのりますが、『旅行記「山水小記」』の一部を紹介しておきましょう。〔花袋紀行集〕第三輯、博文館・大正一二年）

それはもう十三年も前のことであった。

まだその頃には、汽車は出来てゐなかつたので、この地方の交通は、すべて宍道湖乃至中の海を航行する汽船に由つて通ぜられてゐた。松江から平田へ、宍道へ、庄原へ。すべてかういふ風に、小さなベンキ塗の青い白い汽船は航行して行つた。

私はその時は備後の三次から入つて来た。従つて順序として、先づ杵築へと行つて、大社に参拝した。そしてそこに一夜泊つて翌日、今市から直江を通つて庄原へと来た。

湖をわたつて松江に行く汽船が、そこから出たのであ

その対岸に長く連つて見たたされてゐる赤い絶壁、その上に高く連立している鳥根山脈、ことに夕日に半ば影られた湖水の美しさと言つたら、何う形容して好いかわからないほどであった。私は甲板の上に立ち尽した。

図84は、明治四〇年にいくつかの汽船会社が合併してできた合同汽船の汽船ダイヤ表ですが、これも庄原の汽船発着場のにぎわいを証明するものといえます。発着船とも一日八回を数えています。

庄原は、南高瀬川を通じて、東方宍道湖沿岸と南方雲南方面の貨物が中継される場でもありました。いま明治二十四年（一八九二）の實際をみますと、東から入つて高瀬川を上る貨物は、塩（五七四〇俵）・砂糖（二万五二〇斤）・石油（一三七九石・瓦（三万六〇〇〇枚）・米待石（四一九個）で、西から高瀬川を下る貨物は、米（五四〇石・炭（四万二八〇〇貫・鉄（一九〇束・榎実（九七〇〇貫）となっています。

宗安寺入口の北角には当時藤野屋という商店があつて、仁多島上の卜藏家の鉄を扱つており、また、寺の後には川（いま道路）を隔てて飯石吉田の田部家の鉄置場があつたと伝えられています。

ところで、図85の庄原埠頭の写真ですが、明治三〇年代

る。

今はもうあゝした混雑した光景はないであらう。あゝした色彩の多い巴里は巻いてゐないであらう。さびしいところになつて了つたであらう。しかし、その時分は、庄原は賑やかであつた。湖の港として、霞ヶ浦の土浦、琵琶湖の大津、それ以上に賑やかであつた。大きな料理店もあれば、旅館もあつた。

殊に、私の記憶に残つてゐるのは、その大きな料理屋の庭に、沢山鯉や金魚が泳いでゐたことであつた。私はそこで、備後の山の中から伴れて来た車夫にわかれて汽船に乗つた。

私に忘れられない印象を残したのは、その庄原の埠頭から、その小さい二十噸の汽船が、狭い堀割を通つて次第に広い湖水の方へと出て行く光景であつた。それは丁度午後四時頃で、夕日が美しく湖の半面を照してゐたが、その堀割の兩岸には、桟が並木のやうに栽まられて、すっかり美しく紅葉してゐた。私の若い心はあこがれざるを得なかつた。

私はそこで始めて、宍道湖の最初の光景を見たのである。それにしても、何といふ美しさであつたらう。また、何といふ世離れた感じのする湖水であつたらう。ことに、

松江大橋東西各航路汽船航海時刻表			
七月三十日ヨリ左ノ通り改正仕候			
合同汽船株式會社			
松江米子線時間表			
松江	米子	松江	米子
...	...	...	...
美保関境線時間表			
松江	美保関	松江	美保関
...	...	...	...
松江庄原線時間表			
松江	庄原	松江	庄原
...	...	...	...
松江平田線			
松江	平田	松江	平田
...	...	...	...

図84 合同汽船の汽船ダイヤ表
『山陰新聞』明治40年7月29日号から。